

■ ケーススタディ(c) ミムさんの場合

ミムさんはバングラデシュ北部のシェルプール出身の13歳の少女です。2年前からダッカ市で家事使用人として住み込みで働いています。将来の夢は、支援センターの授業の中で一番大好きな縫い物のお仕事をすることです。

私は、シェルプールで6人きょうだいの2番目として育ちました。小学4年生までは学校に通っていましたが、11歳からは家族を支えるためにダッカ市で家事使用人として住み込みで働いています。家族は現在もシェルプールに住んでいるので、お母さんやお父さんのことや恋しく思います。

支援センターを知ったきっかけは、スタッフの戸別訪問です。雇い主の息子がスタッフと話し、私のことを紹介してくれました。雇い主から「センターに行きたい?」と尋ねられたので、私はすぐに「行きたいです!」と答えました。

センターでは友だちもできて、先生もおもしろく、毎日が楽しいです。センターに通うようになって、前はできなかった料理や刺繡ができるようになりました。シンガラ(カレー味のじゃがいもを小麦粉の皮で包んで揚げたもの)やピタ(米粉で作った甘い揚げ菓子)もセンターで習い、作ることができるようになりました。勉強が楽しく、仕事がないときは、テレビを見ずに勉強をして過ごしています。雇い主もやさしく、私のためにベンガル語の本を買ってくれました。

センターに通うようになってから、将来についてよく考えるようになりました。縫い物が好きなので、洋服の仕立ての仕事に携わりたいと思っています。センターの先生や通わせてくれる雇い主には本当に感謝しています。



自分で作ったマットを嬉しそうに見せてくれました。
後ろに写っているのはセンターの先生です。



拭き掃除をするミムさん。